

● 研究概要

本研究では、新宿西口フォーク集会を例にポピュラー音楽に含意される大衆性と社会変革への志向との連関について論ずる。新宿西口フォーク集会は「ベトナムに平和を！市民連合」（ベ平連）の活動の一つとして、1969年2月からおよそ5ヶ月の間、現在の新宿西口地下広場にて開かれた催しである。運動の最盛期にはおよそ7000人が集結し「政治の時代」を特徴付ける運動の一つとして記憶されている。

新宿西口フォーク集会（以下「フォーク集会」）には、社会運動と音楽実践という二つの面が存在している。フォーク集会を社会運動として捉える場合、そこには催しの母体となったベ平連に対するまなざしが存在する。新原（2003）は、社会運動のカテゴリーとして「市民運動」が意識され始めたのが1960年代であると述べているが、催しの母体となったベ平連もまた市民運動を標榜しており、フォーク集会もその一環として捉えられることになる。しかし、フォーク集会に対するこのような視点は、彼らが用いたフォークソングという存在を等閑視しており「なぜ社会運動の場においてフォーク音楽が用いられたのか」という動機については説明が不十分である。一方で、フォーク集会を音楽実践として捉える場合、当時のフォーク音楽が持っていた「プロテスト」という政治的なメッセージ性を強調する傾向があり、この催しもそのようなメッセージ性を表出させた例として捉えられている（Mitsui 2013）。しかし、このような視点は、フォーク集会と当時のポピュラー音楽を取り巻く状況を過度に同一視している。フォーク集会の直接の担い手となったのは、プロのミュージシャンではなく大学生を中心としたアマチュアのシンガーたちであり、「社会秩序への挑戦」（矢澤 2003:59）という尺度において両者には少なからず隔たりが存在していた。

以上に記したように、新宿西口フォーク集会という事象は「目的」としての社会変革に「手段」としてのフォークソングが密接に連関しており、両者を切り離して論ずることはできない。本研究は新宿西口フォーク集会の例を通して、ポピュラー音楽に含意される大衆性と社会変革への志向性について考察し、両者の親和性および矛盾を明らかにする。

● 参考文献

小熊英二, 2009, 『1968』新曜社.

佐藤八寿子, 2003, 「レトロスペクティブな革命——七〇年代フォーク・ソング」佐藤卓己『戦後世論のメディア社会学』柏書房, 167-192.

辻俊一郎, 2001, 『フォークソング運動——二十五年目の総括』新風舎.

新原道信, 2003, 「市民運動の多様性 I 自らを見直す市民の運動」矢澤修次郎編『講座社会学 15 社会運動』東京大学出版会, 139-156.

室謙二編, 1969, 『時代はかわる——フォークとゲリラの思想』新報新書.

矢澤修次郎, 2003, 「社会運動と社会学」矢澤修次郎編『講座社会学 15 社会運動』東京大学出版会, 57-102.

渡辺裕, 2017, 『感性文化論——〈終わり〉と〈はじまり〉の戦後昭和史』春秋社.

Adorno, Theodor W., 1941, "On Popular Music: with the assistance of George Simson" *Studies in Philosophy and Social Science*, 9: 17-48 (＝村田公一訳, 「ポピュラー音楽について——ジョージ・シンプソンの支援を得て」渡辺裕編訳『アドルノ音楽・メディア論集』平凡社, 137-207.)

Frith, Simon, 1981, *Sound Effects: Youth, Leisure, and the Politics of Rock'n'Roll*, New York: Pantheon Books.

Mitsui, Tôru, 2013, "Music and protest in Japan: the rise of underground folk song in '1968'," Beate Kutschke and Barley Norton eds., *Music and Protest in 1968*, New York: Cambridge University Press, 81-96.

Negus, Keith, 1996, *Popular Music in Theory*, Cambridge: Polity Press. (＝2004, 安田昌弘訳『ポピュラー音楽理論入門』水声社.)

Williams, Raymond, 1976, *Keywords: A Vocabulary of Culture and Society*, London: Croom Helm. (＝2011, 椎名美智・武田ちあき・越智博美・松井優子訳『完訳 キーワード辞典』平凡社.)